

アイロニー・理論・確実性：ノースロップ・フライの アイロニーの理論について

高橋 哲 徳*

Irony, Theory, Certainty : On Northrop Frye's Theory of Irony

Tetsunori TAKAHASHI

Abstract

Northrop Frye's theory of modes of literature in *Anatomy of Criticism* has been regarded as a self-sufficient, closed system that neglects the historical and social aspects of literary study. In this essay, through a deconstructive reading of his theory of modes and analysis of function of irony in it, referring essays on tropes by Kenneth Burke and Paul de Man, we will inquire a possibility of theory of Frye beyond a text-context opposition.

Keywords : Irony, Theory, Northrop Frye

1

一般的にノースロップ・フライの批評は、文学批評における構造主義の先駆であると同時に、なおも審美主義的要素を残したものの、つまり、奇妙な表現ではあるが、審美主義的形式主義とでも呼ぶべきものと見なされており、フライに対する批判もそれぞれの側面に関して行われている。たとえば、構造主義的側面については、『批評の解剖』¹においてフライが提示する文学様式の分類が必然性を欠いていること、形式化が不十分であるために完結した体系として機能し得ないことなどが批判され、他方において、審美主義的側面については、文学の科学的、形式主義的分析と自律的体系の構築を志向するあまり、文学を取り囲む歴史、社会などの外部を捨象していること、文学というものを、それ自体で生成し発展していく自律的言語構造として扱っていることなどが批判される。

これらの主張の対極性はフライの批評を検討

する立場の違いに起因している。彼の構造主義的批評としての欠陥の指摘は、構造主義に対する好意的視座からなされ、審美主義的傾向に対する批判は、構造主義に対する批判的視座からなされているのである。後者から見れば、フライの批評が十分に構造主義的であったとしても、その審美主義的傾向は免罪されないだろう。たとえば、ツヴェタン・トドロフは、『幻想文学論序説』²において、「文学現象が形成する『諸構造』は、現象そのもののレベルに顕現する」、言い換えれば、そうした構造は直接に観察可能なものだ」というフライの理論における「公準」を批判している。

ごく単純化して言えば、フライの目には、たとえば森と海が基本構造をなしていると言えるだろう。構造主義者には、逆に、この二つの現象は一つの抽象的構造の表われである。そうした構造は、知的同化作用の産物として、どこか他所で、たとえば静的なものと動的なものとの間で、分節化されているのだ。……構造主義者にとっての「構造」が、なにより

平成 12 年 10 月 13 日受理

* 総合教育センター・講師